

Title	仏蘭西経済学に於る価値論の発達 ( 四 )
Sub Title	
Author	津田, 誠一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.10 (1924. 10) ,p.1500(132)- 1525(157)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19241001-0132">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19241001-0132</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

### 佛蘭西經濟學に於る

### 價值論の發達(四)

津 田 誠 一

十五

Henri Joseph Léon Baudrillard (1821-1892) は一八五七年小冊『Manuel d'économie politique』を上梓、這中演述せらるる價值觀念は大體鄉黨の先蹤を踏襲しつつも、尙且つ英國流の影響の漸く顯現せんとする兆候を裏切り示せるものがある。彼れは先づ「效用は吾人の欲望と諸物との關係を意味し、價值は相互に交換せらるる諸々の富自體の間の關係を意味す。是れ兩者の異なる所以なり。是れと交換に於て人が多量の富を收受する所の物は其價值高く、是れに所屬する購するに際して生産費よりも遙かに甚大なる役目を演ず」と云ふし、之を佛蘭西流に特色してゐる。(Manuel d'économie politique, 4<sup>e</sup> édit. Guillaumin, 3<sup>e</sup> partie, chap. II, pp. 240-241, 243-244, 247-248)。

斯くの如くにして Baudrillard に於ては、一物の價值は效用に加ふるに、「其貨物の吸收せる勞働及び資本の分量」を代表するものであつた。此效用の觀念と勞働乃至費用の觀念との結合は彼れをして、「價值は相交換せらるる二個の勞働の割合なり」と云ふ Passat の提言を是認せしむるに至つた。但彼れは價值が交換より隔離して優に存在し得可き事實を洞見してゐた。乃ち曰く「交換は價值を決定すれども其基礎にはあらず。價值は孤立の人間に對しても、效用とは別に存在す可し。唯だ彼れが此價值を決定せんと欲するならば、彼れは其所有に係る種々なる産物の相互の間に、比較を行はざるを得ざる可し。

買力の弱き物は其價值低し」と定義せる後、例へば空氣陽光の如く萬人に對して無限無償に配給せらるる自然的共有の富と、其分量有限に、交換せらるる可く占有せらるる可き富とを區別し、唯だ後者にのみ價值の稱號を賦與し得るものとした。而して以爲らく、價值は效用無くして存在するを得ず。蓋し後者は前者の必要不可欠なる條件なればなり。乍併此效用は之を生産するに、隨つて之を獲得するに、難易の別ある可し。此見地よりして勞働は價值の基本と思惟するを得んと。然し價格の變動を解剖するに當つて Baudrillard は偏狹なる勞働説に執着する事無く、「價值は需要供給の法則に依つて決定せられ、且つ一般には、生産費に準じて律せらる」と云ふ穩健着實なる結論に到達し、更に「人々が一生産物に對して感ずる希求は、價值を決定するに際して生産費よりも遙かに甚大なる役目

斯くして彼れは例へば、「余の二本の筒は余の一隻の小艇に價せず」と稱するを得ん」と (op. cit. p. 242. note 1.)。之を要するに Baudrillard の演述は動搖逡巡到底整然たる理路の貫徹を發見し得ざるも、然も明瞭に英國流の思索の影響を反映せる一事に至つては、何人も首肯する所であらう。此折衷的傾向は亦た Passy の所說中にも之を看取する事が出来る。

Hippolyte Philibert Passy (1793-1880) は軍職より轉じて經濟學上に數個の著作を残したが其價值論を最も簡明に窺知せしむるは Guillaumin の經濟辭典中「效用」並に「價值」の二項に關して寄稿せる論文である。此論文に従へば彼れは單に交換價值のみを認識して使用價值を疎んじ、恰も一物は日用價值 Valeur usuelle 無くして賣買價值 Valeur vénale を具有し得るものとすべし、解釋せるかの概がある。假令彼れが正確に「自

然的效用」換言すれば各人が其獲得に何等の爲す所無く何等の支出する所なくして之を享樂し得る效用と、「人爲的效用」換言すれば吾人が或は大或は小なる難苦を伴ふ所の努力又は或は多く或は少き報償を意味する所の經費を支拂ふ事に依つて收得する效用とを區別したるにせよ、又彼れが一物の所有乃至使用に於て利益或は享樂を發見する事を條件とするにあらずんば、吾人が努力をも經費をも全く提供する事無しと云ふ意味に於て、「效用は諸物の價值に必要不可欠なり」と認知したるにせよ、彼れは此效用を以て原料・耐久力・勞働等諸物に本質的に合體せらるゝ性質なりと看做せるものゝ如くである。

是れ即ち彼れが價值は相交換せらるゝ諸物間に於る分量の割合なりと定義せざるを得ざりし所以である (Dictionnaire de l'économie politique, t. 1, p. 808, 809, 810, 811, 812, 813, 814, 815, 816, 817, 818, 819, 820, 821, 822, 823, 824, 825, 826, 827, 828, 829, 830, 831, 832, 833, 834, 835, 836, 837, 838, 839, 840, 841, 842, 843, 844, 845, 846, 847, 848, 849, 850, 851, 852, 853, 854, 855, 856, 857, 858, 859, 860, 861, 862, 863, 864, 865, 866, 867, 868, 869, 870, 871, 872, 873, 874, 875, 876, 877, 878, 879, 880, 881, 882, 883, 884, 885, 886, 887, 888, 889, 890, 891, 892, 893, 894, 895, 896, 897, 898, 899, 900, 901, 902, 903, 904, 905, 906, 907, 908, 909, 910, 911, 912, 913, 914, 915, 916, 917, 918, 919, 920, 921, 922, 923, 924, 925, 926, 927, 928, 929, 930, 931, 932, 933, 934, 935, 936, 937, 938, 939, 940, 941, 942, 943, 944, 945, 946, 947, 948, 949, 950, 951, 952, 953, 954, 955, 956, 957, 958, 959, 960, 961, 962, 963, 964, 965, 966, 967, 968, 969, 970, 971, 972, 973, 974, 975, 976, 977, 978, 979, 980, 981, 982, 983, 984, 985, 986, 987, 988, 989, 990, 991, 992, 993, 994, 995, 996, 997, 998, 999, 1000).

望と生産者の出費との兩者を衡平に尊重し、「諸物をして希求するに足るものと爲す性質、並に人的勞働無くしては之を取得するの不可能なる事、是れ諸物に價值を賦與する條件なり」と云ふのが、Passy の最後の斷案であつた (op. cit. V. Valeur, p. 811. 1<sup>re</sup> col.; p. 815, 2<sup>e</sup> col.—Turgeon: La Valeur d'après les Economistes Anglais et Français, pp. 395-398)。

斯くの如くに Baudrillart 及び Passy 一家の所論は、價值學說上に英國流の影響の徐々に乍併着實に浸潤し來れる事實を反映せるものありと雖、然も彼等は此の傾向を廣く學界に普及するには、其力未だ餘りに微力であつた。此の趨勢の助長は大部分 Garnier に負ふものである。

十六

Joseph Garnier (1813-1881) が一八四五年

第十八卷 (一五〇三) 雜 錄 佛蘭西經濟學に於る價值論の發達

第十號 一三五

其英佛二流の折衷的傾向を表示するものとし、ては、Passy は價值の構成要素に複數を擧げる。以爲らく諸物に價值を賦與する最初の要素は、其種類の肉體的なると精神的たるを問はず、奢侈の追求にせよ美術の愛好にせよ、自尊心虚榮心の誘惑にせよ、總て「消費の欲望」である。次の要素は諸物の「有償性」 onérosité である。換言すれば人が勞働乃至生産費に依つて爲さざる可からざる其部分である。最後の要素は諸物の或は大或は小なる稀少性並に或は大或は小なる交換性である (op. cit. p. 809, 1<sup>re</sup> col.)。是れ先には Bastiat が價值を以て「有償性效用」 utilité onéreuse 「交換性效用」 utilité échangeable を豫想するものなりと爲し、後に Varias が之を要約して、「價值とは何ぞや。曰く稀少性效用 utilité rare なり」と云へる言説と、「一脈相通の

“Elements d'économie politique”なる題下に初版を公刊し、一八六〇年第四版以降 “Traité d'économie politique”と改題せる一書は、爾後尙數版を重ねるの盛況を呈し、小型の卷中に凡ゆる斯學の諸問題を壓縮包含せる好著にして、個々の論旨に關しては瑕瑾尠なからざるに拘らず、自由主義經濟思想の佛蘭西に於る黄金時代を劃する一八四八年乃至一八七〇年に亘る期間學界に寄與せる貢獻は洵に甚大なるものであつた。而して其價值論に至りては佛國傳來の心理的解釋を確固として把握し乍ら、傍ら英國流の見解を巧みに咀嚼攝取した。抑々彼れは經濟學の基本對象を人間自身に外ならずと思惟した。乃ち以爲らく、欲望と私利是れ經濟的發達の主なる動因である。「此兩者無くんば個人の活動は遲滯又は終熄す可く、社會的生活は停止又は弛緩す可し。兩者は努力・勞働・發明・深慮・

節約・所有の刺戟劑なり」云 (Traité d'économie politique, 9<sup>e</sup> édit. p. 14)。かるが故に亦た此兩者は價值の基礎である。價值は之を效用より分離する能はず效用は之を欲望より分離するを得ない。斯かる經緯に依つて價值は人間自體に關聯する。然らば價值とは何ぞや。Garnier は明かに交換價值と使用價值の區別を認めた。乃ち前者に關しては、價值とは吾人をして諸物を鑑賞尊重せしむるものにして、交換に依つて顯現するが故に之を諸物の「交換能力」と云ふを得可し。畢竟其は「其れ自身の中に效用と交換性とを兼有するものなり」と云ひ、然も後者に關して、「人は價值を交換無くとも理解し得可し。孤島に於る Robinson は諸物の價值、其作業の成果の價值を、彼等の相對的の效及び彼等を得得する爲に彼れが冒せる困難に基いて、評定し比較するを得可し」と云へるは、此事實を表示

appropriabilité et transmissibilité 無かる可からず。空氣は直接至大の效用あり又或る意味に於て移讓し得可きも、之を占有する事不可能なるが故に價值無し。人間の才幹は人格に固着し占有せらるれども、之を移讓する事不可能なるが故に價值無し。唯だ其外的發現たる勞働勤勞等は如上の兩性を具發するが故に價值を生ず。第三の條件としては、諸物が萬人の自由處分に委ねられざる事を要す。換言すれば其が或は大或は小なる制限ある分量に於て收受せらるゝ事、則ち其が絶對的若しくは相對的に稀少なるを要す。至大の效力ある空氣が無價值なるに拘らず、一層緊要ならざる效用を持つ金剛石が高價なるは、前者が豊富にして後者が稀少なる爲である。但稀少及び稀少性なる用語には二通の意味がある。一は豊富に對峙して僅少なる分量を指し、他は欲望に比して存在量の僅少なるを云

するものである (op. cit. pp. 9-10)。

Garnier の折衷的傾向調合的論旨は、彼れが價值の原因を一層詳細に分析するに當つて明瞭となる。彼れは Passy が三要因を見たる所に五條件を列擧する。曰く、「價值の本源は之を私利及び欲望に溯及せざる可からずと雖、然も其は生産の結果にして且つ交換に依り表現せらるゝものなるが故に、諸物が或は大或は小なる量に於て價值を具有するが爲には、五個の一般的原因あり。第一に且つ最も重要なるは效用、換言すれば諸物をして欲望の充足快樂の獲得に適當ならしむる性質にして、是れ無くんば諸物を其所有者に對しても其收得可能者に對しても他の總ての人々に對すると同様に、無用無益たらしむる所のものなり。洵に直接的又は間接的の效用は價值の必要不可缺の條件である。第二に諸物が價值を具有する爲には被占有性及び被移讓性

ふ。後の意義に於る稀少性のみ價值に關聯す。

此點に發足して論者多く需要供給の法則を説くも、然も需要及び供給は其れ自身他の背後の原因に左右せらるゝものにして、之を價值の根本的原因とは認め難し。即ち前掲の三原因並に後述の二原因こそ需要及び供給に影響する所の、價值の根本的原因である。又一物が效用を有し被占有性被移讓性を備へ且稀少性を伴ふ時は、其は交換の目的物たり得可し。由て此三原因は亦た之を「交換性」exchangeabilitéなる一語に包括するも可なり。

第四の價值の原因は一物の生産が多少の困難を代表する事、則ち努力苦痛有價的勞働を必要とする事、一言以て之を掩へば生産費を要する事である。前例金剛石の價值も實は單に其稀少性のみならず、之を發見し運送し加工するに莫大なる費用を要するを以て、高價に上るのであ

る。水の廉價なるは事情是れに相反するを以て  
ある。最後に第五の原因は分業の作用に依つ  
て購買者に對し節約せらるゝ勞働である。事實  
購買者をして、人が彼れに供給する所の物に效  
用具備し且つ彼れが是れに對して欲望を覺ゆる  
後に於て、交換を肯んせしむる所以のものは、  
是れ彼れが間接的の道程に依り取得する貨物が、  
彼れが之を自ら製作せんと欲する場合よりも、  
彼れに對して努力・苦痛・犠牲・勞働を要求する  
事一層少なき故である。嚴密に云ふ時は、此觀  
念は效用及び欲望の觀念中に包容せらるゝも  
のである。乍併之を單獨に分離して考察する事  
は、價値の觀念を明瞭ならしむる所以である」  
と (op. cit. pp. 271-274)。

轉じて其價值變動論を窺ふに彼れは其主要な  
る法則として四項を擧げる。即ち以爲らく、價  
值變動の第一法則は當然前掲價値の諸基礎の分

析より起來する。價值は其構成要素の各々に、  
或は正比例し或は反比例し或は複合的比例に於  
て上下する。詳言すれば其は效用又は欲望に正  
比例し、移讓性にも認識せらるゝ比例を保ち、分  
量には反比例し、交換性には複合的比例を持ち、  
既遂又は節約せられたる勞働並に他の生産費に  
正比例する。而して交換の實情と取引の大局を  
周到に觀察する時は、效用・節約せられたる勞  
働・欲望・消費を代表する所の需要と、分量・既遂  
の勞働・生産を代表する所の供給とは互に牽制  
し、價値の低落は需要を促進し價値の騰貴は供  
給を促進し、斯くて需要と供給は均衡を保持す  
る傾向を有し、且つ此經濟的均衡の條件は、諸  
物の大部分が其生産費に正比例して相交換せら  
るゝに基く事を知る可し。是れに附隨して如上  
の現象を完全に實現せしむる條件たるの意味に  
於て、自由競争は價値の一般的法則なりと云ふ

事が出来る。又 Garnier は更に附言して、價値  
の諸要因、諸物の需要供給及び其生産費に影響  
する所のものは總て價値の變動に關係し其數擧  
げて數ふ可からざるも、就中重要なものを摘  
出すれば、人口、科學、資本である。人口は欲  
望則效用と勞働とを同時に代表し、科學と資本  
は或は産額を増加せしめ或は費用を減少せしむ  
る事に依りて生産を完全ならしむと云つてゐ  
る。要之 Garnier の所謂第一法則は、「價値は需  
要及び生産費に正比例し供給に反比例して或は  
増加し或は減少す」と云へる言説中に、壓縮せ  
らるゝものである (op. cit. pp. 284-287)。

第二に而して一層優勢なる原因は、社會の安  
定不安定景氣不景氣である。不安定不安不景氣  
なる状態に於ては、欲望は停頓し相對的稀少性  
は減少し供給は増加し需要は減少し價値は低落  
する。是れに反して平穩にして一般に好景氣な

る状態に於ては、欲望は擴大し稀少性は増大し  
供給は減少し需要は増加し價値は騰貴する。約  
言すれば「價値は安定及び一般的好景氣に正比  
例し、不安定及び社會的不景氣に反比例して騰  
落する。」

第三に「一財の價値の騰落は此財との關係に  
於る他財の價値に逆抗的影響を及ぼす。換言す  
れば一財に於る騰貴は他財に於る低落を齎ら  
し、一財に於る低落は他財に於る騰貴を齎ら  
す。」

第四に右同斷の理由に依り「諸物を價値の尺  
度たる財との關係に於て考察する時は、諸財の  
名目的價値は此の尺度の價値の騰落と反對の方  
向に騰落する」。價値變動の法則は如上の四箇  
條に歸着すると云ふのである (op. cit. pp. 287-  
288)

思ふに Garnier の所論は其價值基本論に於て

も價值變動論に於ても、原因の大小輕重を問はず根幹枝葉を無差別に羅列し、綜合に過ぎて緊縮を缺くの短所歴然たるものあれども、佛蘭西流の心理的解釋と英吉利流の客觀的傾向とを彼此融合せんとするの努力は充分之を看取する事が出來やう。

十七

一八七〇年以降佛蘭西の經濟學界は普ねく社會の凡ゆる方面に澎湃せる、普佛戰後の頽勢を極力挽回せんと欲する滔々たる時流に喚發せられて、幾多の碩學を出し幾多の文献を生んだ。應て彼等は自づから二個の學派に分岐した。一は傳來の自由主義經濟學を忠實に遵奉し英國思想を接受せる翰林院派他は獨逸思想を濾過包攝し國家干渉主義並に社會主義的傾向に交々好感を有する大學派であつて就中後派は錚々たる論客を網羅してゐる。乍併斯くの如き分岐が従前色

彩に濃淡の別こそあれ大體心理本位に步調を揃へ來れる價值學說上の傳統を、攪亂し破壊せりと思惟するは早計である。諸他の問題に桎梏相容れざる彼等の見解も此一點に於ては背馳する事稀である。疑も無く彼等は「最終效用」*utilité finale*を環る若干の考察を異邦の學徒に負へりとは云へ、此負債は寧ろ從來の主觀的傾向を援助するものにして毫も之を覆滅する能はず。斯くて大局より通觀するに此國現代の諸家は、其孰れの學派に歸屬するを問はず、價值論の關與する限りに於ては心理的解釋を嚴守せるものと看做す事が出来る。遮莫爾く多數の群儒の爾く多數の群書に就いて各々個別的の詳述を試る事は極めて難澁なる作業たるのみならず、假令之を企及し得たればとて冗漫重複徒に讀者を倦怠に導くのみなる可きを以て、吾人は爰に演述の態様を一變し、便宜上「價值の定義」、「使用價值

と交換價值の區別」、「價值の基本的條件」、「價值の評定」、「價值の變動」の各項目の下に、現代諸家の價值論の大勢を總括的に檢討せんと欲するものである。

先づ價值の定義より始むるに例へばCourcelle-Seneuil, Yves Guyot, F. Levasseur, E. Villey, C. Colsonの如くに、價值を交換の職能 *fonction* に依つて定義する者尠からず、蓋し彼等の重視する所は社會的役目、商業的意義、即ち購買能力の方面より觀たる價值である。彼等は之を其外的結果に依り表示せらるゝ力 *force* と看る。斯かる思索の傾向はColsonに於て特に著しい。曰く「人呼んで財又は勤勞の價值と云ふは、交換の道程に依つて異種の財又は勤勞の一定量を獲得し得る其資格である。價值の觀念は交換の觀念と不可分なり」と (Colson: Cours d'économie politique, 2<sup>e</sup> édit. tom. I. pp. 70-71, p. 88)。乍

併諸家の見解に従へば此は過言である。斯くの如き定義は唯だ價值の一種則ち交換價值に關してのみ眞である。其證據に價值の中に唯だ「交換の比率」を見るのみなる人々と雖、交換が價值を創造するにまでは極論しない。Colsonも却て價值が交換の動源たるを認むるに躊躇せぬ、乃ち苟くも交換の締結せらるゝ爲には、契約兩當事者の各々が自己の讓渡する所よりも自己の收受する所を獲得する事に、一層の利益を發見せざる可からず。故に交換は雙方が其取引の瞬間に於て有利と思惟する行動である。此條件實現し取引の行はるゝ爲には、彼等の各々が其讓渡する所と其收受する所の間に均等 *équivalen-* *ce* 存すと思惟するを要すと思料した (Colson: op. cit. tom. I. p. 70)。價值の觀念が吾人の交換の意志の動機となると云ふ意味に於て、交換が價值を説明するにあらずして價值が交換を説

明するのである。即ち價值は交換の以前に存在する。是れ大多數の見解の一致する所である

(P. Leroy-Beaulieu: *Traité théorique et pratique d'économie politique*, t. III p. 17; Maurice Block: *Les progrès de la science économique*, 2<sup>e</sup> edit. t. I. pp. 150-151; Joseph Rambaud: *Cours d'économie politique*, t. I. p. 56)。

加之價值を交換能力に依り定義する時は、由て生ずる缺陷一再に止らざる可し。先づ其は恰も價值は人間の外部に存在し、物に固有の性質なるかの誤解に導く危殆あり。固より佛蘭西現代の論客は其の傳來の心意的傾向に伴せられて何人も此過失に陥る者無しと雖、定義自體に此缺陷の伴へるは掩ふ可からず。次に交換能力を以て價值を完全に定義し得たりと信ずる人々は、單に價值の外的現象を見て其内的構成を逸するものである。彼等は單に價值を取引の上に

現はす購買力を説明するに止り、之を人間の胸奥に生み出す所の本源的原理を説明しない。

G. De Molinari が「假令耕作者の倉庫中に存する穀物、工場主の倉庫中に存する綿布より全然其價值を奪ひ去るとも、尙且つ是等諸品は一の價值を具有す」と云へるは、如上の交換價值萬能の定義に慊らざる一般的傾向を表示するものである(Nouveau Dictionnaire d'économie politique, edit. Guillaumin, t. II. V<sup>e</sup>. Valeur, p. 1146, 1<sup>re</sup> col.)。

又斯くの如き定義は價值を原因に従つて定義するにあらずして結果に従つて定義するものである。(Rambaud: op. cit. t. I, pp. 44-45) 彼等は金は多量の物を購買し得るが故に大なる價值を具有すと云ふも、反對に金は大なる價值を具有するが故に多量の物を購買し得と稱するも亦た眞である。而して何が故に其は大なる價值を有

する乎。爰に全問題の焦點は存する。而して其の解決は例へば Beaugard が、「是れ其が吾人が既に之を所有する時は之を保存せん事を望み、吾人が未だ之を所有せざる時は之を獲得せんと欲する希求を刺戟する所の、資質を有する故である」(Elements d'économie politique, p. 102)と云へると、同経緯の思索に俟たねばならぬ。更に交換に基いて價值を定義するは、是れ汝の讓與する一物の價值を、他人が汝に讓與する一物の價值を以て定義する事である。換言すれば、是れ價值を以て價值を定義する事である。吾人は最早是れ以上の呶々を必要としない。畢竟價值を商業的作用に徴して説明する代りに、人間自身が其胸奥に形成する觀念の中に其方式を探求するのが、一層有益であり且つ合理的である。是れ Paul Leroy-Beaulieu が之を定義して

賦與する重要な程度なり」と云ひ(Traité d'économie politique, tom. III. p. 16)、或は Charles Gide が「凡そ欲求の對象たる諸物は、其欲求せらるゝの程度等しからず。吾人は是等諸物の間に尊重の順位を定め等級を立つ 價值の觀念爰に發生す。價值は交換と不可分にして交換を離れて價值を想像する能はずとは、是れ一般の説く所なり。乍併吾人は是れに賛する能はず。孤島に於る Crusoe すら比較の標準を有したり。蓋し吾人は彼れが其難破船より先づ第一に其最も欲求する所の物を搬出せるを知らばなり。而して假に共產主義的社會の實現を見たりとせんか、交換は消滅す可きも價值の觀念は消滅せざる可し」との言説ある所以である(Cours d'économie politique, 3<sup>e</sup> edit. English trans. edit. Heath, pp. 44-45)。

「價值とは吾人が諸物の所有又は獲得に對して

今如上の解釋に従つて一層之を鮮明ならしむ

る爲に、價值觀念の若干の特徴を列擧する事は必ずしも蛇足ではあるまい。

第一に價值は獨立の存在を有するものにあらす。其は諸物の自然的性質中に具はる絶對固有のものにあらず。其は人間の鑑賞を俟つて始めて存在を與へらる (Beaulieu: op. cit. p. 26; Courcelle-Seneuil: op. cit. pp. 232-233; Rambaud: op. cit. t. I. pp. 54-55)。

第二に價值は二物間の相對の觀念割合の觀念比較の觀念である。一物が他物との相對的關係に於て考慮せらるゝ場合に於てのみ、其價值が發生する (Beaulieu: op. cit. p. 26; Coison: op. cit. p. 72; Alfred Jourdan: Cours analytique d'économie politique, p. 427 et 434; Gide: Principes d'économie politique, 6e éd. p. 56, etc.)

第三に價值は變動的なるものである。人間が諸物の效用に關して行ふ判斷自體が不安定なる

ものなるが故に、諸商品の相對的價值は絶え間無く變動する。假令所謂「正當價值」 Valeur nominal を許容する論者と雖、「固定價值」 Valeur constante を認むる事無し (P. Cawès: Précis du cours d'économie politique, 2e éd. t. I. Nos 192-200, pp. 185-191; Beaugard: op. cit. pp. 192-193; Villey: Principes d'économie politique, 3e éd. pp. 207-208, etc.—Turgeon: La Valeur d'après les Économistes Anglais et Français, p. 404-409)。

十八

然らば人は如何なる態様に於て、且つ什麼の理由に依つて、斯くの如き或る程度の尊重則ち價值を諸物に對して與ふる乎。

價值との區別は爰に發生する。諸家の間には往々使用價值を以て效用と混同し、單に之を吾人の欲望を直接に満足せしめ隨つて吾人の希求を喚起し得る諸物の資格と解する者あれども、通説に従へば使用價值の觀念中には斯かる效用斯かる希求性以上のものを包含する。價值は必ず比較を伴ふ。使用價值は吾人が效用あり希求せらるゝ諸物の間に設くる撰擇の等級を豫想する。其は各自が一物の所有又は保存に關して、其欲望充足の可能性と轉置及び再生産に伴ふ困難の大小を考慮に入れつゝ、之を他物との相對的見地より律して判斷する個人的利益を表明するものである。故に例へば Cawès の如く單に、「二個又は二個以上の效用の比較、之を使用價值と名付く」と云ふのみにては未だし。是れに加ふるに稀少性の發動を俟たねばならぬ。

(Cawès: op. cit. t. I. No 156, p. 159; Jourdan:

op. cit. p. 427; Gide: op. cit. pp. 55-56 et 242. Perreau: op. cit. t. I. pp. 68-72)。各人に對する重要な程度を決定する所の此比較判斷は、當然個人的であつて純然たる主觀の世界に展開する。其は孤立單獨の人間に在りてすら發現する。Gide と共に Gustave de Molinari も亦た這般の道理を、絶海の孤島に單身漂着せる物語の主人公に假託して説明する。曰く Robinson と雖亦た價值の意識を有したり。此價值は交換と離れて存在す。「彼れは食糧を蓄藏し衣服を作製し天幕小舟を築造す。彼等の作業の結果たる是等の種々なる生産物は一の價值を具有す。如何となれば是等諸物は彼れに對して單に空氣陽光の如くに效用ある物件たるに止らず、其は效用以外の一要素、換言すれば其生産に彼れの支出せる勞働を包含する故である。」是等の彼れの勞働の所産に就いて彼れは之を比較する事が



出来る。即ち是等諸物が彼れに要求せる努力並

賦與するのである。

に是等諸物が彼れに致す利益とに就いて秤量を行ふ事が出来る。例へば彼れは「余の一隻の小舟は余の天幕の二倍に價し、且つ余の天幕は余の衣服の三倍に價す」と稱し得るが如し云々。

交換價值は此使用價值の社會的表現である。詳言すれば其は其所有物を入手に移譲せんとして各自が、其所期の取引を行ふに必要な相手方を發見する爲に、他人の意向市場の狀況を考慮に入るゝに及んで、始めて現前するのである

通説亦た之を是認してゐる (Molinari: Nouveau Dictionnaire d'économie politique, v<sup>o</sup> Valeur, p. 1145, 1<sup>re</sup> col.; Leroy-Beaulieu: Traité d'économie politique, t. III, p. 25; Rambaud: op. cit. p. 45)。

は價值を表示し測定するも之を創造するものと云ふを得ざる所以である。固より現在の複雑せる交易經濟の下に在りては、交換價值は往々使用價值よりも人間の心裡に優越的地位を占める。乍併其は其が相交換せらるゝ諸物の主觀的效用を、一層容易に比較せしめ得る故である。

而して社會生活を營める人間の思索も亦た孤立單獨の人間の思索と異らぬ。苟くも吾人が諸物を其具備する效用と其要求する努力との二重の見地より比較するや否や、所謂「評價」evaluationと稱する精神作用が、吾人の心理に使用價值を實現する。總て如何なる場合に於ても、各人は其れに就いて自己が個人的に抽出する所の利益に従ひ、其所有に係る諸物に對して此使用價值を

換言すれば交換價值は相交換せらるゝ諸物の與ふる使用價值を、秤量し得可き形態客觀的なる相貌、直接其欲望を満足せしむる個人の私的狀態より隔離せる一般的性質を以て外部に表現す

る故である。(Colson: op. cit. p. 87; Block: Les progrès de la science économique, 2<sup>e</sup> édit. t. I, p. 165)。

而して此公的集合的評價が多々の場合に、個々の私的評價の上に反動を及ぼす事は疑を容れぬ。斯くて使用價值なる内的計算は屢々交換價值なる外的潮流の爲に朦朧たらしめらるゝと雖、尙且つ後者が前者を先在條件とするは争ふ可からざる所である。蓋し交換價值の中に顯現する賣手及び買手の一般的意向は使用價值を決定する個々の人々の意向を、基礎として成立せるが故である (Colson: op. cit. p. 90)。

畢竟交換價值は使用價值に倚賴すると共に、他方に於て市場に反覆せらるゝ取引の實例に依り、一層明瞭に之を表現するのである。

更に使用價值と交換價值との區別は、Paul Leroy-Beaulieu 一派の強調するが如くに、二個の見地よりして興味があり且つ重要である。

第一に實際的見地より觀察するに、或る種類の取引に於ては使用價值が過重の役目を演ずる所のものがある。特に其顯著なる適例は保險である。父祖傳來の故山の舊邸の如き其交換價值は極めて小なるに拘らず、追懷の念愛惜の情切なるの餘り、所有者が之を過大の保險に附するは屢々見聞の事實である。即ち彼れは此場合交換價值よりも寧ろ使用價值に偏して保險額を決定し、多大の保險料を支拂ふ事をも敢て辭せざるものである。

第二に心理學的見地より觀察するに、使用價值の觀念は愈々擴大する。即之を度外視しては交換の實現を説明する事も理解する事も不可能である。蓋し欺瞞なく強壓なしに締結せらるゝ、正常の交換に於ては、人は等價に對して等價を交換する。此均等に依つてのみ取引の公平は確保せられるのである。然らば此場合兩當事者に

取つての利益は那邊に存する乎。曰く兩交換者は各々成る程相等しき交換價值に對して相等しき交換價值を授受すれども、彼れが獲得する貨物の彼れに對する使用價值が彼れが讓渡する貨物の彼れに對する使用價值よりも、一層大なりと云ふ點に於て各々の利益は生ずるのである。

若し各自が交換に依つて一の私的利益を抽出する事を期待せざるに於ては、取引は決して行はれぬであらう。交換價值とは別に使用價值の存するにあらざれば交換は存在の理由を持たぬ (Leroy-Beaulieu: op. cit. pp. 22-23; Rambaud: Cours d'économie politique, t. I. pp. 55-56; H. Truchy: Cours d'économie politique, t. I. p. 15 — Turgeon: La Valeur d'après les Economistes anglais et Français, pp. 409-417)。

吾人は以上如何なる態様に於て價值が発生するかに關する諸家の見解を瞥見した。次には如

何なる理由に依つて價值が発生するかの問題に遷らねばならぬ。

### 十九

既に價值を以て吾人が諸物の所有又は獲得に對して賦與する重要な程度なりと解する以上は、此重要な程度を吾人の胸奥に決定せしむる條件如何。一層適切に之を表現せば、吾人をして諸物を撰擇せしむる動源如何。此問題は當然價值の構成要素に觸れる。而して諸論の歸趨を概括すれば大様次の如くである。

第一に價值の基礎には先づ欲望の感受 *Desire éprouvé* を擧げねばならぬ。欲望は人生の行旅に於て吾人の缺く可からざる伴侶である。其は凡ゆる活動の最初の動因である。人は常に欲望の提出する二つの道の孰れか一を撰ばねばならぬ。欲望を抑止する努力若しくは欲望を充足する努力即ち是れである。而して彼れが一旦後者

を撰擇するに於ては、彼れは勞働に従事し效用を作出し價值を生産する。故に「人に依り欲せざる、事無き物は人に對して價值ある事無し。吾人をして或は直接に勞働に依り或は間接に交換に依て、一物を獲得す可く一定の犠牲を支拂ふを肯んせしむる所のものは、其充足の爲に之を要求する所の實際的若しくは想像的欲望である」(Courcelle-Seneuil: Traité théorique et pratique d'économie politique, 2e éd. t. I. pp. 26-29; Cavès: précis du cours d'économie politique, 2e éd. t. I. No 196, p. 188; Charles Gide: Principes d'économie politique, 14e éd. p. 43, etc.)。

第二に右と關聯して價值は滿足の追求 *satisfaction recherchée* を包含する。此欲望自體が價值の一動因である。蓋し内に欲望を抱くと雖之を抑止して外に其の對象を追求せざるに於ては價值は發生の機縁を失する故である。此點に

關しては姑らく英吉利の Sydney Chapman が、「欲望は通俗の用法に於ては願望と往々同義にして、第一單に渴望切願を意味するか、第二に若しくは特定の事物を所有し又は特定の行爲を遂行する爲に、犠牲を支拂ふを辭せざる決意を意味するか、聊か曖昧なる用語である。隨つて酒精を渴望し然も禁酒を嚴守せる所の者が、一杯の水を求むる時に當つて尙且つ彼れは酒精性飲料に對して欲望を有すと云ふも何等の矛盾無し。蓋し其は假令彼れは今麥酒でなく水を飲用せんと試みつゝあれども、彼れは麥酒に切望を有すとの意なればなり。乍併經濟學徒の直接關與するは第二の意義に於る欲望のみ」と云へる言辭を参照すれば、其意自づから明瞭となるであらう (Chapman: Outlines of Political Economy, p. 21)。

第三の價值の基礎は前叙の欲望の感受と滿足

の追求との關係より成る效用である。效用は人間と物との關係であり、随つて主觀的事項である。固より麩麩の饑餓を癒するに適する性質は人間の欲望より獨立して客觀的に存在し得れども、效用其物は人間が事實是れに對して欲望を感ぜざる限り此物に潜在してゐる。則ち經濟學的に換言すれば其は存在しないのである (Courcelle-Seneuil : Traité théorique et pratique d'économie politique, t. I. pp. 40-41; Levasseur : op. cit. pp. 9-11)。畢竟效用は諸物の物理的性質にあらず。其は人間の欲望を前提とし之を満足せしめ得る諸物の力と見る可き、經濟的性質である (Villey : op. cit. p. 203; Jourdan : op. cit. p. 426; Gide : op. cit. pp. 50-53, 56-57, etc.)。

第四の要素は稀少性である。蓋し此欲望充足の經濟的能力を具有する諸物が、人が之を獲得するに何等の努力犠牲を要せざる程に爾く豊富所に價值無しと云ふ所以である。

但爰に稀少性と云ふは數學的客觀的絕對的の意義にあらず。經濟學上に所謂稀少性とは、諸物の豊富又は僅少と是れに對する欲望との比較より成ると云ふ點に於て、主觀的であり相對的である。斯くして撞木杖の價值は跛行者の員數と不可分である (Cawès : op. cit. Nos 197 et 200, pp. 189-192; Beaufregard : Elements d'économie politique, p. 192; Gide : op. cit. pp. 57-60, etc.)。畢竟 Colson の言葉を以て結論に代ふれば、「一の貨物又は一の勤勞が價值を具有するが爲には、其が或る程度に於て效用があり且つ稀少性がある事を必須の條件とする。如何となれば先づ其は人々若しくは少くとも其内の幾人か、其物に對し是れと交換に於て何等かの他物を讓與する意向となる程に、之を取得せんとする充分活潑なる欲望を發見する事を必要とし、次に

に存在するに於ては、經濟學は單に效用認識の科學と化するであらう。乍併事實は然らず。效用の大部分は消費せらるゝ以前に先づ生産せられる。是れ Molinari をして「價值とは生産せらるる效用なり」と定義せしめし所以である (Nouveau Dictionnaire d'économie politique, t. II. v. Valeur, p. 1143, Ire et 2e col.)。其結果自然が吾人に興ふる無償過剰の效用は價值の領域より除外せられる。效用を伴はざる價值は無意味である。乍併此效用は有償的でなければならぬ。換言すれば努力に依り作出せらるゝか費用に依り獲得せられねばならぬ。效用無くんば何物も探求せらるゝ事無し。されど量の制限無くんば何人も其生産其獲得に寸毫の勞苦犠牲を支拂はぬであらう (Cawès : Précis du Cours d'économie politique, 2e édité. t. I. Nos 156 et 157, pp. 159-160. et N° 159, pp. 183-184)。是れ稀少性無き

此欲望充足の手段が、各人が何等の犠牲を提供せずして自由に之を所持する程に、爾く豊富に存在せざる事を、必要とするが故である (Colson : Cours d'économie politique, t. I. p. 71)。

第五に多數の學説は價值の要素として更に交換性 *échangeabilité* を追加する。彼等に從へば價值の賦與せらるゝが爲には、物が所有の目的物則ち財たるを要す。然らざれば交換の道途に依る讓渡獲得は想像するを得ないであらう。爰に於てか價值と云ふ經濟的觀念は、所有と云ふ法的觀念の上に接木せられるのである (Cawès : Précis du Cours d'économie politique, t. I. N° 189, p. 183; Perreau : Cours d'économie politique, t. I. pp. 67-68)。遮莫何が故に此移讓性 *transmissibilité* は必要なる乎。曰く其は交換が人生に必要にして、且つ價值は此必要の心理的啓示なるが故である。然らば實際に於て交換存在の理

由は那邊に存する乎。Molinari は答へて云ふ、「是れ人が交換に依つて一層少量の勞働を以て一層多量の效用を、隨つて一層少量の苦痛を以て一層多量の享樂を、獲得し得るが故である」。然らざれば交換は發生せざる可し」(Molinari: Nouveau Dictionnaire d'économie politique, t. II. vo Valeur, p. 1145, 2e col.)。是れ價值の可能性が交換の可能性に結合せらるゝ所以である。才能健康の如くに交換融通譲渡の不可能なるものは價值を持たぬ。是等に關しては唯だ「若し之を轉々占有するを得ば價值ある可し」と條件的に云ひ得るのみである (Block: Les progrès de la Science économique depuis Adam Smith, 2e edit. t. I. p. 132 note; Levasseur: Précis d'économie politique, p. 178)。

陽光の如く絶對に移讓不可能なるものは、效用を有し得るも價值無し。更に進んで公的權力に依り財の流通人

間の商交の圏外に排除せられし貨物は、同一の理由に基き依然富たるを得可きも價值を保持する事は不可能と云ふを得可し。蓋し是等諸物に課せられたる非讓渡性は、之を融通し占有するを得ざらしむ。其は私的領域より公的領域に入る。港灣・道路・公園・博物館等は法律に依り全然獲得の可能性を剝奪せらるゝ、隨つて亦た評價の可能性を剝奪せらるゝ。其は公的富にして交換性を排除せるが故に、私的價值を具有し得ざるものである (Cavès: Précis du Cours d'économie politique, 2e edit. t. I. No 157. p. 161; Jourdan: op. cit. p. 431)。

乍併注意を要するは交換性と交換とを混同してはならない事、續つて如上の論旨より演繹して、價值は交換を俟つて始めて創造せらるゝと極論してはならない事である。交換は價值を轉置し秤量し確定するのみ (Colson: Cours d'économie politique, t. I. p. 175; Gide: op. cit. p. 50 et 242)。吾人は既に若干の論客が交換の役目を誇張するが如き言辭を弄せるを見、然も學界の大勢が是れに讃同せざる事を述べた。爰に價值には交換性を必要とすと云ふは、交換を行はゞ行ひ得らるゝ可能性あるを要すと云ふの謂ひにして、必ずしも事實上交換の行はるゝを要すと云ふ意味ではないのである。

第六に勞働を以て價值の要素と看做す可きや否やに關しては、佛蘭西に於ては前世紀の末葉以來峻嚴に吟味せられた。而して此問題に關しては諸家の或る人々は、不用意なる言説を發せる事を認めねばならぬ。例へば Courcelle-Seneuil が「相交換せらるゝ凡ゆる貨物の常例的價值 Valeur habituelle は、之を取得するに要するであらう所の勞働に比例す。勞働は斷然價值の最初の原因である。價值は平常是れに依つて秤量

せらるゝ」と云ひ乍ら、他方に於て「一物の常例的價值は普通此物の生産に必要な勞働に比例す」(Courcelle-Seneuil: op. cit. t. I. p. 243 et 287)と云へるが如き、前言に聞けば之を購買する消費者に對して節約せらるゝ可き勞働を意味するが如く後説に徴すれば之を販賣する生産者に依りて支出せられたる勞働に近く、人をして適從に惑はしむるものがある。Cavès の所説も亦た等しく不鮮明不確實である。乃ち價值と勞働との連鎖を承認せる後、此勞働の何たるかを探求して、「是れ此生産物を獲得する爲に節約せられたる勞働なり」と斷じ乍ら、他方に於て「此節約せられたる勞働の尺度は生産費なり」と爲し、故に結局「生産者に依つて提供せられたる勞働と、獲得者に對して節約せらるゝ勞働とは、實際に於ては代替し得可き言葉である」と思料した (Cavès: Précis du Cours d'économie politique,

2e édit. t. I. Nos 192, 194, et 195, pp. 185-188)。其謬見なるは多言を用ひない。但上記兩家の内 Courcelle-Seneuil は唯だ價值の常例的傾向を説くのみである。換言すれば交換價值は通常、*opportunity* 生産者に所要の勞働若しくは消費者に要す可き所の勞働に依り訂正せらるゝの傾向ありと云ふに止り何等の他奇無し。又 *Caves* は其節約せられたる勞働たるを投下せられたる勞働たるを問はず、價值が勞働に正比例す可しとは決して認めてゐない。以爲らく、如何なる勞働も其結果として社會的效用を帶同するにあらざれば價值無し。故に力の無用の支出は價值を生産する事無しと (*Caves: op. cit. t. I. no. 195, p. 188, no 201, p. 192*)。

而して斯く勞働が價值の專一の原因にはあらずと爲すの見解は、現代諸家の擧つて一致する所である。就中此點を力説して權威あるは、蓋し其は左の事實と相背反する諸結果を招徠す可きが故である。

第一に同量の勞働を所要せる二物は同等の價值を具有せざる可からず然るに實際に於ては、一園丁が二個の花壇に同量の勞働を投下するも其價值等しからざる事ある可し。

第二に同量ならざる勞働を所要せる二物は等しからざる價值を具有せざる可からず。然るに地味の肥瘠に依り同量ならざる勞働の所産たる等質の穀物は、依然同等の價值を具有す可し。第三に何等の勞働をも所要せざりし貨物は何等の價值をも具有せざる事となる可し。然るに鑛泉・鑛山・森林・天然牧場等は何等の勞働を加へざるに莫大の價值あり。

第四に一旦一物に投下せられたる勞働は變化する筈無く、隨つて此物の價值は永久不變ならざる可からず。然るに實際に於ては價值は常に

Maurice Block & Charles Gide である。乃ち Block は謂へらく、「凡そ人の勞働するは自然の缺陷を補填し諸般の欲望を充足せしめんが爲なり。故に勞働は其れ自體が價值を有するものにあらず、又欲望を満足せしむる以上に大なる價值を有し得るものにもあらず。其價值は即ち謂はば勞働の生産物の效用に比例するなり。隨つて效用ある物の生産に投せられたる勞働自體は、何等の價值をも生産せず」と (*Block: Les progrès de la science économique depuis Adam Smith, 2e édit. t. I. pp. 176-185*)。更じ Gide は次の如き諸項を列擧して勞働一律の價值論を反駁してゐる。以爲らく、成る程勞働は吾人の欲望の充足に必要な諸物を生産するが故に隨つて其稀少性に影響し、其結果亦た價值に影響するは争ひ難き所である。乍併是れあるの故に價值と勞働を同義語なりと結論するは短見である。

變動す。

最後に若し凡ゆる價值の單獨の原因が勞働に在りとするれば、勞働其物の價值の原因は如何。固より一定の土地の價值を其齎らす收穫の價值に依りて決定すると同様に、勞働の價值を其生産物の價值に依りて一應は説明し得可し。されど更に此生産物の價值を説明するに之を産出せる勞働の價值を以てするに於ては遂には極まる所無き循環論法に陥るものと云はざる可からずと (*Gide: Principes d'économie politique, 16e édit, pp. 62-67*)。斯かる總ての矛盾は人間に依つて感受せらるゝ欲望が吾人の價值判斷並に吾人の勞働の意志の原因なるを悟らば、直に氷解するべしと (*Rambaud: Cours d'économie politique, t. I. pp. 57-58*)。

畢竟勞働は價值に多大の影響を及ぼすものなれども、單に其れのみにては價值を創造しない。

而して此結論は之を勞働の觀念の代りに生産費の觀念に對して適用するも亦た同斷である。

第七に乃ち佛國現代の諸家は、無限に再生産の可能なる商品の價值は生産費を中心に牽引せらるゝを認容し乍ら、尙且つ生産費を以て諸物の價值の原因と看做すの見解を回避し得た。諸論の概ね一致する所に從へば、生産費は決して價值の發生要素 *élément générateur* にあらずして、唯だ需要供給の調整要素 *élément régulateur* に過ぎざるのみ。假令一生産物の價值が其所要の生産費と不變の比例を保つにせよ、換言すれば市場價格が原價 *Prix de revient* に依つて左右せらるゝにせよ、價值の基本は他に存する。則ち吾人が吾人に歸屬する諸物の間に設くる所の、便益の程度重要な程度の中に使用價值の根本が、而して獲得の願望の強度と其獲得の相對的難易の中に交換價值の基本が存在するのであ

る。生産費が價值の原因にあらざるは、販賣に附せらるゝ生産物の價值が却て屢々投下せられんとする生産費を決定するに徴して明かであらう。即ち一企業に諸般の費用を支出する以前に於て、思慮ある生産者は總て先づ、彼れが將に製造せんと企圖する貨物の未定の價值は、果たして幾許なる可きかを研究するの用意を怠らぬであらう (*Block: Les progrès de la science économique depuis Adam Smith, 2e édit. t. I. pp. 171-172; Gide: op. cit. p. 61. note I.P. 66, note 3, et pp. 154-155; Levasseur: op. cit. pp. 178-181*)。固より他方に於て、緩急の差違こそあれ原價に依つて先づ供給の上に、次で價值の上に調整的壓迫の加へらるゝ事も亦た拒否するを得ない。爰に於てか人或は生産者の滅亡と生産物の減少とを喚起する事無くして、價格が永く生産費の限度以下に低落する事の不可能なるの故を

以て、生産費の總和を指して必要價值 *Valeur nécessaire* 自然價值 *Valeur naturelle* 中心價值 *Valeur Centrale* 眞實價值 *Valeur réelle* 正常價值 *Valeur normale* 等と呼稱する者がある。疑も無く交換の存する以上は需要と供給は常に均衡を保つ。乍併此均衡は生産費に依つて決定せらるゝ水準の、或は上或は下なる水準に於て現前し得るであらう。

最後に勞働又は一層適切なる言辭を以てすれば生産費が、凡ゆる價值の中に於て、之を創造する爲に投下せる努力克服せる障礙を代表する事は認めねばならぬ。是れ幾多の論者が所謂獲得の困難 *difficulté d'acquisition* を以て、價值の有償的性質を明示する適切なる用語と思惟する所以である。然るに此獲得の困難なるものは事實上、或は希求せらるゝ貨物の稀少性なる事もある可く、或は生産又は再生産に必要な勞働

乃至費用なる事もある可く、或は之を獲得するに要したる犠牲たる事もある可し。即ち其は諸物の獲得に要せる所の凡ゆる苦痛凡ゆる費用を同時に包容するものである。斯くの如くに考察し來れば價值構成の諸條件は、結局二箇條に歸着せしめ得るであらう。吾人が諸物に對して有する欲望と、之を吾人に獲得する爲に吾人の感ずる困難是れである。通説の大様は畢竟爰に歸趨する (*Villeg: op. cit. p. 206; Jourdan: op. cit. p. 457; Perreau: op. cit. t. I. p. 348, — Turgeon: La Valeur d'après les Economistes Anglais et Français, pp. 421-436*)。

吾人は以上價值の定義價值の形態及び價值の構成條件に關する諸論の大勢を検討した。次には價值評定の問題に關聯し、最終效用 *utilité finale* の演ずる役目を中心として、諸家の見解を觀察するであらう。(未完)